2023.3.1

現代俳句千葉

148号

巻頭エッセイ

本を買う

幹事　三宅　たくみ

久しぶりに本を買った。毎月の俳句誌を読むことに追われて、最近本を購入することはとんとなかった（そこのあなた、今、鼻で笑いましたね）。

本を捜して手にするとドキドキした。本を買うとはこんなにも高揚感を伴うものだったことを久しく忘れていた。レジで「カヴァーをおかけしますか。」と尋ねられて、それも新鮮であった。雑誌にカヴァーをかけることはないからだ。

本を買うことがないと先に言ったが、それは「自分が読むため」の本であり、実は姪たちのために本はよく購入している。誕生日やクリスマスのプレゼントは、専ら本である。その所為で、彼女らの家は本で溢れかえっているらしい。幼い頃はかわいい絵本などでよかったが、年齢が上がるにつれ本選びは難しくなる。興味や趣味もはっきりして来るし、あまりに簡単すぎては、もらってもつまらないものになってしまう。それでも本を贈るのは、やはり本を手にした時の高揚感を味わって欲しいからだと思う。

最近の子どもにとって一番はゲームであり、本はあまり嬉しくない贈り物になっているかもしれない。しかし、姪から「ごほんいつもうれしいよ」と書かれたメッセージカードが届いた。子どもなりの気遣いかもしれないが、本を読んでいる様子であった。

私は本を扱う仕事をしているため、そんな子どもが今時いることは喜ばしいことと思って、そのカードを職場の机に飾った。気が付いた同僚は「姪御さんですか。かわいいですね。」と言ってくれる。

図書館で子どもを多く見かけるという話も聞くし、書店で熱心に本を見ている子もたまにみかける。「子どもはゲーム」と言うのは大人の先入観で、環境が整えば子どもたちも本を読むのかもしれない。

姪たちには本を読む習慣を忘れず育ってほしいと思うし、大人になったら本を買うわくわく感を味わって欲しいと思っている。

目　次

本を買う　三宅たくみ …… 1
諸家近詠・千葉を詠む …… 2～5
会員・会友の近況 …… 2～3
私の感銘句 …… 6～8
津田沼研究句会報告 …… 9
青葉研究句会報告 …… 9
柏研究句会報告 …… 9～10
君津研究句会報告 …… 10
初心者講座　強化部だより …… 11
ひろば・図書紹介・掲示板 …… 12

千葉県現代俳句協会会報

諸家近詠

寄居虫や今の住まいはプラボトル　金子　未完

噴水や映画の恋はローマにて

出土品次々に出る芋畑

喜寿を祝ぐ離農も思案冬田道　遠藤　寛子

鴇色の雪煙る富士今暫し

酉の市異類異形の刻に入る

閑処無く疲労困憊初寝覚め

さくさくと幸先詣ゆめうつつ　里見　さち

釣銭のきれいなお札一葉忌

美しき箱すてられぬクリスマス

銀杏落葉やをとこの子をんなの子

巻きぐせのヨーガマットや早や七日　岡﨑　翠

脳トレの一日一句穴惑ひ

人去りし番屋のあとの酔芙蓉

秋うらら娘のやうな嫁とゐる

冠雪の富士に真向かふ高速道　河合　利枝

初電話受話器補聴器最大限

文月や辞書にしちがつひちがつ生まれ

白夜なるスコットランドプレスリー忌

デパートは吾の里山夏まひる　黒澤　雅代

春着着てテレビの戦争遥かにす

精神の渇きに触るる花石榴

癒しふと飯桐の実のいつもの空

銀木犀夢に来し人みな若し

ドリブルや辿り着きたる大晦日　國分　三徳

上底の箱いっぱいに四月馬鹿

初日の出道は一本共白髪

地底から息抜きに出て曼珠沙華　小野　功

転生の星座を描き山眠る

霜柱二の足を踏む罪悪感

福の豆飛んでとべとべ年男

暁の予言通りに春小雨　柴田　洋郎

眼裏に野戦の兵士夢はじめ

爪切れば何か新し去年今年

村雀一羽居残る寒さかな

木枯や水無川にも銀の波　坂間　恒子

ランボーを撃つヴェルレーヌ冬の薔薇

月光の投網のかかる枯はちす

アンドロメダおよぎつきたる梅の花

さみしさの青歯朶ひらく音を足す　久野　康子

管楽器弦楽器柿の鈴なり

白菜をひらけば昼の渚なり

梟のまばたき海を見るごとし

なまはげのひとり金髪あそび藁　佐々木幸子

珈琲を濃い目に淹れし梅日和

ホスピスの白き扉に春の蝶

でで虫は校舎の塀の調査隊

茶の花や何処へも行かず誰も来ず

《会員・会友の近況》

・ここ数年コロナのこともあり千葉県内を多く巡るようになりました。千葉には長く住んでいるのに発見が多いものです。皆様の「千葉を詠んだ作品」をガイドに出かけるのが今から楽しみです。（遠藤　寛子）

・戦後生まれなので自分の使っている言葉で書きたいと思っています。色々な種類の句を書く楽しみを密かに持ち続けたいです。（河合　利枝）

・今年は九十一歳になってしまいます。どんな景色がみえてくることやら。俳句を道連れに旅を楽しんでみます。（國分　三徳）

・参加する俳誌に「昭和の俳句　西東三鬼―昭和俳壇の遊撃手」を昨年より連載中。その関係で、久しぶりに寺山修司の俳句や評論を読み、改めてその早熟ぶりと尖鋭さに感心しました。（近藤　栄治）

・昨年八月、脊柱管狭窄症が悪化し手術。結果は予想以上の快復で、三か月で全快。あの歩行困難は何だったのだろうと思いつつゴルフもコースに出ています。（椎名　鳳人）

・連れ合いを見送り、これからと思うものの頭はお休みのようです。コロナが収まって吟行に参加出来る日を楽しみにしております。（大見　充子）

・韓流ドラマに夢中で句作や読書の時間が短くなり、金銭もＤＶＤに流れる状態です。反省しなくてはと思っています。（齋藤　溥子）

・早く自由に皆様にお会いしたいです。毎日家に籠っています。（小林　実）

・コロナ下でスタートした初心者向け「イン

諸家近詠

大根煮るたましいという大荷物　塩野谷　仁

極月の水を見ていることが旅
やがて崩るものに頬杖六連星
仮の世の仮の嘘をして晩年　清水　伶

夕ひぐらし魂函（たまばこ）いくつ開け放ち
太陽の消印ひとつ黒揚羽
はるかとは父いる午後の漆の実
シベリウス聴いているなり縞梟　近藤　栄治

抜かれし歯のみじめたらしく年の暮
雑踏にぽつんと独り猟期来る
日向ぼこ遠き記憶にけもの道
バルカンの水を匂はせ寒波来る　久保　筑峯

涼しさや胡坐をかきて耳を掻く
朴の花無念菩薩の御手細し
鉄線花老いるも心若くして
老いぬれど恋せよコスモス揺れ動く　越野　雄治

伊東屋に4Bを買ふ秋の昼
三度目も痩せ秋刀魚にて終りけり
ウオツカの壜の形に冬来る
葉牡丹の渦いつから無神論　澤田　寿一

水遣りの頷く程に赤まんま
失念の行ったり来たり竹の春
秋雨やリュックに重き立ち話
燻りを酌み交わしたり楠若葉　椎名　鳳人

流木の精霊ならん鷹柱
氷点の水に漲る力かな
筒抜けの密談冬の白牡丹
霊峰に木霊鎮もる氷面鏡　佐久間眞城

古稀米寿未だ未だ初老暮の春
一節を十切れに盛るや初鰹
老いらくの恋は夜更けの遠花火
俺も哭き貴様も泣きし終戦日　大見　充子

深眠り春の真ん中シーラカンス
散る桜散らぬわたしと思いたし
立春大吉月の兎がまろび出て
綿虫のあれはわたしの旅心　川守田美智子

天網の破れぐるぐる巻くマフラー
オリオンの奏でる音色街眠る
冬晴れや切絵を抜ける馬の群
冬苺ひとつぶ抱く哀の色　齋藤　溥子

明け方の地上はベール六花
新畳香りて外は水仙花
コーランの祈りはトルコ冬の旅
父がいる野菜色した寒夕焼　小林　実

茅が崎に途中下車して春の風
百年後の我は焚火の中にいる
脱皮後の少女はさくら吹雪かな
狐火を見にゆく我等SLで

ターネット句会《金蘭の会》も三年目になりました。（金　蘭）

・マスクしての句会、聞き取りに難儀です。国はマスク解除案も。でも不安。素顔のままの句会を願っています。（小川トシ子）

・昨年末に突発性難聴を発症。今鍼の施術中です。（尾形ゆきお）

・流山市商工会議所女性会主催で、流山本町をメインに「ひなめぐり」が開催され早春を彩ります。二月二十三日から三月五日まで。ただいま、つるし雛、うさぎ雛作りの講習会に忙しい日々です。（岡田芙美子）

・我が家から五分程で江戸川土手。サイクリングロードが通り、海から四十四kmの標識があり運動をかねてよく散歩します。寒い季節になると真白な富士山や筑波山の眺めが楽しみです。健康のためと思いできるだけ歩くことを心がけ、また季節の移ろいを楽しんでいます。（興津　恭子）

・一昨年脳梗塞で倒れ俳句から遠ざかっておりましたが、頑張って投句しました。（栗山美津子）

・毎年一つ一つ、趣味と友人が消えて行く。淋しさも薄れる。車の免許はやめろと。やめたら独りの生活が・・。なるようになるといった人がいる。百歳時代、あの終戦時、想像したろうか。運命、あの人、この人を想う。（佐久間眞城）

・人生最終系転居計画にうまく乗り込み、広々二人ぐらしが始まっている。大好きな丘陵地に近い。壱万分の一のハザードマップを手掛かりに地形の情報、集落の寺社のマーク、字（あざ）の歴史などじっくりと味わいたい。今日の昼メシはどこの谷津田やら。「缶ビールコップの取っ手泥まみれ」（北野耕太）

諸家近詠

遠足の列に乱れや洋菓子屋
夏蝶の影ゆらぎゆく海鼠壁
箒目のほがらか寺や酔芙蓉
しぐるるや人の寄りくる阿弥陀堂

金　蘭

群からは遠のいてポツン口紅水仙
落葉時雨知らぬふりしてすれ違い
八重洲から丸の内往復師走
チョコ珈琲寝酒コンビニ依存症

北野　耕太

水底の深き東京夏来る
生かされてみな右を向き葱坊主
憲法記念日卵黄くずれないように
象さんの大きなお尻冬日和

小川トシ子

酔って候額群生の帰り道
炎昼の広場はいつも沼のかたち
慚愧乗せ馬駆けぬける十三夜
きょおと喚いて汽車の真似す子寒鴉

尾形ゆきお

フーコーの振り子や危機に遠き春
ひたすらに重力を私す氷柱
目の隈のあいや暫く梅雨の入り
叩かれてアルミの鍋へ文化の日

大澤　重市

冬の蝶日の坂道を消えてゆき
大股でくる幼き日チューリップ
風景が押し戻されて芋嵐
万華鏡覗いてみれば烏瓜

加賀谷秀男

敗戦日這ひつくばつて畳拭く
独りとは自由不自由吾亦紅
逝きし人だんだん好きにシクラメン
竜天に土竜ただ今作業中

神作　仁子

無音なる死者との会話散る桜
夏薊五歳の嘘のつきはじめ
かまきりの振り向きざまの目に殺意
寄鍋の煮詰まるころは泣き上戸

小野　裕文

紅葉の傾るる中を走行す
越えられしは医師のひと言冬あたたか
冬の朝木もれ日仰ぐいのちかな
枯菊を束ねきのふの病みし日々

近藤　幸子

戦争に軸足ゆらぐ寒い春
柿若葉眠った土地の設計図
曼珠沙華秘かに進む我が病
後より足音が来る十二月

岡田芙美子

買初の歳時記めくる死語数多
なきようであるが国境涅槃西風
裏返す時計は過去へ紀元節
八十の免許更新耕畝の忌

重田　忠雄

生みたての卵の黄味のやうな月
朝食のパンをかりつと緑さす
ベランダのばらのアーチをくぐりけり
たんぽぽのしあわせ色のまん中に

加藤　春草

背景はいつもぼんやり曼珠沙華
石柱は古武士のごとし初嵐
二階には二階の時間鱗雲
冬旱おがたまの木より引き返す

佐藤　禎子

半導体不足白鳥首伸ばす
探しもの失せもの増ゆる春の雪
処方薬なし風船に若い息
ロコモとは無縁なシューズ天高し

興津　恭子

四十雀二羽来て冬日暮れにけり
霜柱踏む五億年の記憶の音
節電日被爆国民越冬支援
数学者ロジックにはまり冬籠る

白木　暢子

初日出ばかりの動画配信日
オキシドールの香の手でめくり初日記
象の鼻すべて筋肉恵方指す
ファックスに叱られてをり初天神

片岡　秀樹

朝一番並ぶパン屋に春一番
浴衣着て「おひとりさま」の気恥ずかし
ベーグルに春の色ある今朝の卓
季寄せ持ちスタバ通いの冬麗

栗山美津子

メタバースで会おう寒の蒲公英ぽっ
蒼天へ大北風の哭く母さん！と
寒風を来て図書館はカンガルー
朝北風や自転車の児に迷いなど

島田　翠松

千葉を詠む

鋸山　金子　未完
春を祝ぐ安房は海光溢る国

江月水仙郷（鋸南町）　遠藤　寛子
ここでは敗者頼朝雪中花

九十九里　里見　さち
海に向く一枚硝子いわし雲

房総半島　岡崎　翠
夏空に波のくづるる小湊線

鎌ヶ谷　河合　利枝
捕っ込めの逃げ切る馬よ春闌ける

大山千枚田（鴨川）　黒澤　雅代
余所事に見し炎天の千枚田

成田空港　國分　三徳
房総の菜の花目がけ成田着

千葉　小野　功
千葉産を確めて買う春野菜

大網白里郊外　柴田　洋郎
上総野に太古の息吹初夜明

鴨川・房総半島　坂間　恒子
死人花海は濃くあり安房の国

谷津干潟　久野　康子
やわらかに生きるか死ぬか干潟は秋

房総海岸　佐々木幸子
房総の海どこまでも春の雲

船橋駅　塩野谷　仁
冬銀河すべての電車佇まる駅

弘法寺（市川）　清水　伶
山椒魚ほどに濡れいて涙石

南房総市　近藤　栄治
伊賀焼を安房にあがなふ女正月

九十九里　久保　筑峯
魚曳く益荒男九十九里ヶ浜

下総　越野　雄治
下総の月夜に太るけむり茸

手賀沼　澤田　寿一
沼の風涼しく橋を潜り行く

谷津干潟　椎名　鳳人
白鳥は風の原型谷津干潟

白浜　佐久間眞城
春霞海程十里伊豆七島

千倉　大見　充子
菜の花は人を待つ色野島崎

笠森観音　川守田美智子
秋声や囚われている弥陀の肢

佐倉　齋藤　溥子
花芒抱くは青き印旛沼

富津市　小林　実
菜の花畑即身仏はいないはず

佐倉市内　金　蘭
武家屋敷垣に大根干されあり

木更津市祇園駅　北野　耕太
ほまち雨きっと降りると君の祇園駅

佐倉市の印旛沼より　小川トシ子
北総の沼尻あたり初時雨

大山千枚田　大澤　重市
水を張り龍の鱗や千枚田

成田山新勝寺　加賀谷秀男
寒晴の雑踏もまた成田山

市原田淵　神作　仁子
蟻穴にここは太古のチバニアン

谷津干潟　小野　裕文
いりまじる脚と嘴冬干潟

日蓮誕生寺　近藤　幸子
炎昼や潮の匂ひの誕生寺

成田山　岡田芙美子
家内安全春光の成田山

鹿野山　重田　忠雄
未生以前の高き碧空銀杏散る

稲毛浜　加藤　春草
白き帆の浮かぶ稲毛の薄暑かな

中山法華経寺　佐藤　禎子
結香の花荒行の声洩れてくる

川間江戸川土手　興津　恭子
遠富士も筑波も見えて冴返る

富浦湾　白木　暢子
白富士やタンカーよぎる富浦湾

銚子　片岡　秀樹
十五夜や屏風ヶ浦の私語

館山　栗山美津子
館山の朝日に目覚む枇杷のジャム

成田山　島田　翠松
愛奪えるか鷹女と存問初参道

私の感銘句

金子　未完

	作者名	号	頁
身の丈を崩れ落ちたり蜃気楼	澤田　寿一		145 8
きのうより大きな夕日春田打つ	徳吉洋二郎		145 10
アラスカにキリン暑くて首をだす	吉野　精		146 2
夏帽子地下鉄女性専用車	前島きんや		146 2
紫陽花にひといろ足して別れんか	横須賀洋子		146 3
食足りて不安な世なり八月来	山中とみ子		146 3
鉄臭の風の下町つばくらめ	保坂　末子		146 4
通勤の無数の独り朝曇	村田　珠子		147 4
蟬しぐれ注射を打つと腹が減る	松澤　伸佳		147 4
海馬は元気ブロッコリーゆであがる	秋谷　菊野		147 5
紫陽花にひといろ足して別れんか	横須賀洋子		

作者の横須賀洋子氏と村井和一氏の指導の恩恵を受け「ひといろ」をつけて育っていった俳人は数えきれない。両氏は小生に十五年前、俳句を初歩から教えてくれた大恩人である。亡き大畑等氏をはじめ句会終了後、津田沼駅前のパーラーに立ち寄り、俳句談義に花を咲かせた記憶が、今も脳裏に浮かぶ。

菜の花のどこをくすぐったら光る　村井和一

國分　三德

わたくしが老婆だなんてスイチョン	鈴木まんぼう		144 3
「雪風」「信濃」戦史は鰯雲となり	荒木　洋子		144 3
この街に降れば汚れてしまう雪	鈴木　一行		144 3
蝶凍てる延命の管皆外ずし	泉　志眞子		144 3
小康の夫にいただく三が日	田沼美智子		144 4
かるた取り負けた児が行く母の膝	原　悦子		144 5
炎昼やここに暴るる胎児居り	宮原　青佳		145 10
踏みだせる義足に力春隣	八島　岳洋		146 2
マスクごと外して使ひ捨ての顔	宮本美津江		146 4
花種を蒔く戦争の終るまで	渡辺　澄		147 5
「雪風」「信濃」戦史は鰯雲となり	荒木　洋子		

「雪風」がまさか俳句になって出てくるとは思わなかった。勿論季語ではない。昭和二十年八月敗戦に終った太平洋戦争当時の日本海軍の駆逐艦のことです。多くの海戦に臨み無傷で生き残った「幸運艦」として知られている。私の親戚、飛田健次郎が艦長として乗艦していた時期もあり、戦後直接当時の戦況を聞かされた記憶が甦りました。七十七年以上前の戦であり鰯雲のように淡い記憶となっていました。戦は人命を失い無残です。

遠藤　寛子

マスクからはみだしている笑い顔	鈴木　一行		144 3
淋しさの底に触れたか浮いてこい	玉山　政美		144 4
へろへろと雲呑（ワンタン）すすり冬に入る	鈴木　岑夫		144 5
アザラシの物言いたげな鼻の穴	島　隆史		144 5
おむすび山は中立地帯夏の霧	松本　千花		146 3
真夜の底蟬穴全部動き出す	森須　蘭		147 4
返り花次々咲いて猫日和	三宅たくみ		147 4
無番地のほとり目差して小鳥来る	蛭名　節昌		147 5
鯖缶のパカッとバレンタインの日	東　國人		147 6
東京メトロ地上を走り神の留守	篠田　京子		147 7
マスクからはみだしている笑い顔	鈴木　一行		

マスクで顔を覆う日々が数年間続いている。そんな中、心身に支障をきたし、学校に通えなくなったり、入院する子どもが激増している。不調の始まりは、マスクで顔を覆い日常すごす中で、相手の表情が読み取りづらい状況に耐え難くなって生じることも多い。これからもまだマスク装着の状態はしばらく続くだろう。ここはひとつ表情筋をフルに動かし、マスクからはみだすほどの笑顔で乗り切っていこうではないか。そう決意させられた。

久保　筑峯

「雪風」「信濃」戦史は鰯雲となり	荒木　洋子		144 3
鞦韆を降りたる吾を母知らず	玉山　政美		144 4
大小の呪文を空へ石鹸玉	杉山真佐子		144 5
死は生の対極ならず春銀河	野口　久		145 9
桃咲いて儚きことをはかなくす	直江　裕子		145 9
ひらひらと詩のように舞う春の雪	長井　寛		145 10
無言という音あり冬銀河あり	徳吉洋二郎		145 10
踏みだせる義足に力春隣	八島　岳洋		146 2
沖縄忌断崖に立つ手と手と手	中山　皓雪		146 2
紫陽花にひといろ足して別れんか	横須賀洋子		146 3

秋谷　菊野

わたくしが老婆だなんてスイチョン	鈴木まんぼう		144 3
問診のマークシートよ緑さす	田沼美智子		144 4
冬林檎着くや合唱ハモるよう	佐藤　映二		144 6
太りきった芋虫何もなければいい	馬場　益江		145 9
A列車でいつかは黄泉へ紅椿	馬渕　津枝		146 2
はつ夏のおもちゃ箱から煙立つ	横須賀洋子		146 3
口角をもっと上げましょ夏は来ぬ	増田　元子		146 3
蓮根掘る子の胎動を聴くごとく	山口　彩子		146 3

足裏が吸いつくしている熱帯夜　森須　蘭　147 4
首かしら足かしら彼岸桜の切断面　市川　唯子　147 6
太りきった芋虫何もなければいい　馬場　益江

この芋虫は私だろうか？　安否確認には思えないけど、「理不尽な死に方はしないで」と思っているかもしれない過労死か過老死。どちらも困る。交通事故や災害死も辛い。読む者を不安にさせる。いろいろなことを思わせてくれる句である。この不条理感は、すばらしい。

中嶋　三雄

秋風や石に顔ある野面積み　鈴木まんぼう　144 3
寺山修司と訛り同じく蜆汁　武田　伸一　144 3
初晴れや還暦に立つ坂の上　白木　暢子　144 6
語らぬが良きこともあり遠花火　髙橋由紀子　144 6
光秀のきっと愛した花馬酔木　直江　裕子　145 9
穏やかな波に島浮く遍路道　津髙里永子　145 10
烏賊墨パスタ黒海に艦沈む　増田　陽一　146 3
鬼灯や鳴らせば青き海の見ゆ　林　みさき　146 4
花種を蒔く戦争の終るまで　渡辺　澄　147 5
畦道をかつては一揆曼珠沙華　浦野　五郎　147 5
穏やかな波に島浮く遍路道　津髙里永子

たぶん、瀬戸内海か豊後水道の島。昔私が四国の海岸を歩いたことも思い出します。「遍路」のいずれも素晴らしい連作五句の中でも、広大な景が見えて特に好きになりました。

小野　功

オリオンの無数の涙レノンの忌　清水　伶　144 3
体内の音入れ替わる冬はじめ　佐藤　禎子　144 3
しばらくは裸のつき合い冬木立　原　悦子　144 5
凍てるほど純度の高い愛がある　田村　隆雄　145 8
格差とは無縁さくさく春キャベツ　永妻　和子　145 9
前世は何者だった春落葉　袴田　菊子　145 9
人間をやめる日ふくろうになる日　細根　栞　146 4
蝸牛身の振り方を考える　実籾　繁　146 4
たった今を忘れています凌霄花　山中　葛子　146 5
痩せました蓮のうてなに乗るつもり　矢野　忠男　147 4

荒木　洋子

この街に降れば汚れてしまう雪　鈴木　一行　144 3
桃色に張る牛の乳春立てり　泉　志眞子　144 3
星呼び込んで鬼の豆一つかみ　倉岡　けい　144 4
夜桜の鼓動そのまま相聞歌　中村　冬美　145 9
人声の垂直に来る寒さかな　徳吉洋二郎　145 10
白蝶の来て軽やかに鳴るピアノ　戸邉　光一　145 10
蓮の実とんで晴れればれとわが山河　中村　直子　145 10
原稿の枡目の歪み熱帯夜　山中とみ子　146 3
戦とはたんぽぽ踏まれてしまうこと　保坂　末子　146 4
記紀よりのことばの集い青葉騒　池田　博臣　147 6

小張　直子

枯葉一枚枝を離るる殺気かな　椎名　鳳人　144 3
陽だまりを生きて淋しき漱石忌　髙橋　宗史　144 4
生き死にを時には思う桜の夜　中村　冬美　145 9
塗り残した白いところが春愁　直江　裕子　145 9
十重二十重いずれ白雲山ざくら　長井　寛　145 10
紫陽花にひといろ足して別れんか　横須賀洋子　146 3
猫じゃらし日に日に多くなりし誤字　山中とみ子　146 3
死ぬという普通のはなしりんご剥く　山中　葛子　146 5
メビウスの帯切れ夫は夏空へ　伊藤　希眸　147 5
残暑のバリトン国に戻れと　秋尾　敏　147 6
猫じゃらし日に日に多くなりし誤字　山中とみ子

最近は誤字が多くなり字引を手もとに置いて居ります。〝サンズイ〟か〝言べん〟か思い迷い困惑気味の毎日です。晩年になると誰彼も皆が陥る事だと思います。作者のとみ子さんが俳句にされて私の琴線に触れてくれました。

松村　五月

遠近をあいまいにする良夜かな　佐藤　禎子　144 3
鞦韆を降りたる吾を母知らず　玉山　政美　144 4
パンドラの箱のどん底が三月　長濵　聰子　145 8
塗り残した白いところが春愁　直江　裕子　145 9
片言も乗せてさくらや菜の花や　永井　奈々　145 9
たをやかな妻の定位置水羊羹　藤好　良　146 2
飛花落花どのひとひらが魂か　宮本美津江　146 4
単線や轉りはさむ文庫本　星野　一惠　146 4
戦とはたんぽぽ踏まれてしまうこと　保坂　末子　146 4
花種を蒔く戦争の終るまで　渡辺　澄　147 5
片言も乗せてさくらや菜の花や　永井　奈々

さくらや菜の花や、春の優しい花たちに幼子の幸せを託す母の姿が美しい。

高橋富久江

黒い海音符のように雪が降る　倉岡　けい　144 4
大仏の螺髪に生れし黄蝶かな　佐藤　鈴子　144 6
少しずつ老い新緑のまたたく間　野口　京子　145 9
寒波来る北斎の波越えてくる　徳吉洋二郎　145 10
花は葉に停ったままの救急車　安井　三緒　146 2

善人はなべて不自由さくらんぼ　横須賀洋子　1463
父祖の地に父祖の歳月地虫鳴く　細根　栞　1464
母と来て小さないびき河鹿宿　森井美恵子　1474
寝正月おとな跨いでゆく子ども　伊与田すみ　1475
楠の樹は父の分身小鳥来る　石井紀美子　1476

冨田　茂

体内の音入れ替わる冬はじめ　佐藤　禎子　1443
一日を一生として白木槿　島　隆史　1445
半径を短かく暮らし落葉踏む　関谷ひろ子　1458
桜花満つ堤にひそと空襲碑　畠　淑子　1459
花びらが相乗りしてるベビーカー　馬場　馬子　1510
田水張る水面に雲の流れ行く　菱木　良一　1464
灯台は海のローソク浜おもと　山田　邦彦　1465
日溜りをセーターの背に持ち帰る　福田志津子　1465
透きとほる木犀の香と朝粥と　上野　紫泉　1475
老いきれぬ口の淋しさ十三夜　和田　三枝　1476
日溜りをセーターの背に持ち帰る　福田志津子

寒い日が続いていますが暖房はどのようにとっているでしょう。この頃は床暖房やエアコンなど、秀れた方法がいっぱいあるので、なかなかこの句のような気持になる事は少ない。でも、年をとるとこの句の様子にホッとする気持と自然の優しさを感じ懐かしくなる。どんなＩＴ社会になろうとも自然とのふれ合いを大切にしたい。セーターの背に太陽のぬくもりを持って帰るとは、作者の優しさが忍ばれる。

大見　充子

わたくしが老婆だなんてスイチョン　鈴木まんぼう　1443
枯葉一枚枝を離るる殺気かな　椎名　鳳人　1443
迂闊にも死は近くにて桃咲けり　下村　洋子　1443
過去ひとつ拾ひ日暮の赤とんぼ　髙橋　健文　1444
あら不思議ともに八十路の獏枕　高木　一惠　1445
げんげ野に遊べ毀れゆく母よ　細根　栞　1464
人間をやめる日ふくろうになる日　細根　栞　1464
春かみなり死をはるばると狂わせて　山中　葛子　1465
亀鳴くやかなしみは人に残りて　渡辺　澄　1475
泪から明日が見えるソーダ水　石井紀美子　1476
迂闊にも死は近くにて桃咲けり　下村　洋子

全くのこと死は迂闊の賜物であり、気付いた時にはすぐ近くまで来ていることが多い。「桃咲けり」淋しいではないか。

岡田　春人

体内の音入れ替わる冬はじめ　佐藤　禎子　1443
小康の夫にいただく三が日　田沼美智子　1444
淋しさの底に触れたか浮いてこい　玉山　政美　1444
寒波来る北斎の波越えてくる　徳吉洋二郎　1510
囀や娘三人妻に婆　馬場　馬子　1510
マスクごと外して使ひ捨ての顔　宮本美津江　1464
香水を鎧のやうにまとふ女　元橋　孝之　1464
選択は寒九の水を飲んでから　三好美穂子　1474
夏蝶と花との会話盗み聞く　山中　頼子　1475
破蓮戦火に耐へてゐる地球　内田　庵茂　1476
破蓮戦火に耐へてゐる地球　内田　庵茂

今地球上では、ウクライナやアフガニスタンなどで戦争をしている。その戦火の中で、大勢の人々が、命の危険に耐えている。

人類は遠い昔から戦争をしてきた。そして戦争を続けていけば、いずれ核戦争によって、自滅することになるだろう。人類は耐えているだけでは、この地球を救えない。破蓮を見つめながら、戦火に耐え苦しんでいる人々のことを思っている。

髙野　春子

体内の音入れ替わる冬はじめ　佐藤　禎子　1443
冬菫廊下に陽射し溜めて置く　髙橋　宗史　1444
寒素振りあげぼの杉の心幹へ　高木　一惠　1445
みどりごの眞水のやうな汗ぬぐふ　千葉　信子　1446
夏座敷潮風太く抜けにけり　中嶋　三雄　1459
春北風ニュースの顔の入れ替わる　富澤さち子　1459
紫陽花にひといろ足して別れんか　横須賀洋子　1463
芽柳の下ならきっと賢治来る　林　ゆみ　1465
飼い猫も主人も雑種姫女苑　森須　蘭　1474
雲にカリヨン晩秋の引用符　秋尾　敏　1476

■総会・俳句大会のお知らせ

既にお知らせの通り
三月十九日（日）に定期総会・俳句大会が千葉市文化センターにおいて開催されます。
定期総会　十時半開会
俳句大会　十三時開催（席題発表は十時）
是非ご参加下さい。

□□ 津田沼研究句会報告 □□

（於：津田沼一丁目町会会館）

●第三六二回（令和四年十一月七日）
司会　徳吉洋二郎

狭き門あり家畜化われに白萩に　高木　一惠
いきなりの訃報ぎんなん降りやまず　徳吉洋二郎
デジタルの波さまよう黄落期　村上　澄子
明快にしてたおやかな人雁来紅　鈴木　瑩子
十月の終わり愛する人のもとへ逝く　小林　実
鯛焼きを二つに割ってじゃんけんぽん　星野　一惠
霜月や尽きせぬ語り無言館　なかもと淑子
黄落のこの世彼の世を管見す　長井　寛
残る虫片付けの山果てしなく　股野　久子
消しゴムで消せる国境泡立ち草　池田　博臣
百日草七、八、九、十冬日影　栗原　正子
闘論のなき大八洲すずろ寒　並木　邑人
来し方のふりかけご飯秋送る　増田　豊子
冬隣り首にひんやり真珠光　白木　暢子

●第三六三回（令和四年十二月十三日）
司会　徳吉洋二郎

町挙げて花のおとうと祭りかな　鈴木　瑩子
降誕祭カードに込めし明けの星　股野　久子
なぐさめてくれる茶の花金の蕊　栗原　正子
残されし言葉あたため年惜しむ　星野　一惠
極月の地球ジレンマトリレンマ　増田　豊子
御上よりお達しのあり重ね着と　なかもと淑子
どの指もあなたを悼む秋の暮　高木　一惠
はだか木や男もすなる肌化粧　村上　澄子
まず先に立行司より新酒酌み　吉野　精
ブラボー　ドーハの冬靄吹き飛ばす　徳吉洋二郎
ポインセチア廊下の奥のテレビかな　池田　博臣
必敗の椅子取りゲームざざ虫煮る　並木　邑人
冬の朝いつも何かが見つからぬ　白木　暢子

●第三六四回（令和五年一月十日）
司会　並木　邑人

初春の光あまねし子供等に　星野　一惠
虎落笛怪しい音も混じる夜　小林　実
沓跡の大なり小なり今年なり　長井　寛
鍬はじめ童話の続き考える　並木　邑人
致死量に少し足らない年の酒　徳吉洋二郎
歳晩や各階止まりのエレベーター　股野　久子
初日影富士の気満ちて雲払ふ　栗原　正子
ゆりかごの方舟おりる年新た　鈴木　瑩子
双六の上がりは末世ちぎれ雲　池田　博臣
身のほどの小さき輪飾り買いにけり　なかもと淑子
とにもかく日差したっぷり初写真　白木　暢子
着ぶくれてマスク頼る防護力　村上　澄子
目薬の鼻に抜け入る去年今年　増田　豊子

□□ 青葉研究句会報告 □□

●第一三四回（令和四年十月二十七日）
通信句会　担当　矢野　忠男

殺戮のキエフに続くうろこ雲　長濱　聰子
綿菓子のような風くる酔芙蓉　石井紀美子
田仕舞の煙国道へ逃げる　加藤　法子
日短派遣ロボ来て家事終える　栗原　正子
弔銃三発銀杏の実降りやまず　徳吉洋二郎
泥濘の東欧羅巴しぐれの忌　池田　博臣
映像の中に戦禍よ秋深し　森井美惠子
床きしむメモの重なり秋時雨　横山　郁子
街路樹の一気に黄葉一直線　山﨑　幸子
秋惜しむバラ苑ヌツと裸婦の像　矢野　忠男
秋の航平成令和つきぬけて　加賀谷英男

（於：千葉市民会館　4階）

●第一三五回（令和四年十一月二十四日）
司会　徳吉洋二郎

一敏忌胸に線状降水帯　長濱　聰子
歩けない吾に南瓜よ馬車になれ　鈴木まんぼう
うれしさを畳む日暮れの豆筵　加藤　法子
カップ麺三分待てば秋が逝く　徳吉洋二郎
生きつづける訳を捜しに紅葉谿　池田　博臣
コーヒーの羊羹切るや十一月　森井美惠子
天上の賑わいさぞや新走り　石井紀美子
室咲きやベンハーの漕ぐガレー船　越野　雄治
銭湯の一番乗りや小春の日　横山　郁子
虚空より零れ落ちたる帰り花　加賀谷英男
梢に宿木高木交信す　栗原　正子
人恋ひの友に電話や冬ぬくし　山﨑　幸子
大盆景暫拝借冬小菊　矢野　忠男

●第一三六回（令和四年十二月二十二日）
司会　並木　邑人

略はつらの形人生は　池田　博臣
我が葬は略儀でよろし冬椿　長濱　聰子
メメントモリ十年日記買ひにけり　森井美惠子
是迄を略して蛇は穴に入る　加藤　法子
空也忌や空也つくりし橋渡る　鈴木まんぼう
略歴になき冬蝶の幼虫期　石井紀美子
闇に呻く魂鎮むるか雪切切　栗原　正子
枯蓮芭蕉はおよそ哲学者　加賀谷英男
七本に上げし三味の音雪深々　矢野　忠男
帰り花トランペット吹く天使　横山　郁子
椅子軋み会話のずれや息白し　山﨑　幸子
捨墓に声かけている冬椿　並木　邑人
声太き内緒話を炬燵猫　徳吉洋二郎

□□ 柏研究句会報告 □□

（於：柏市「ハックルベリー書店」2階）

●第一二一回（令和四年十一月十二日）
司会　岡田　春人

無花果の樹液の憐れ虫の列　藤好　良
コスモスに風の塩梅聞いてみる　岡田　春人
自画像の息つめており枯ひまわり　下村　洋子

銀の鯱隔たる秋へ尾を締める　木之下みゆき
対岸の群衆なだれ冬の雨　橋本志津子
閑けさや枯蟷螂の眼がロシア　椎名　鳳人
葉牡丹の伝言つよく拒絶する　髙橋　宗史
感性の乾きに欅落葉して　野口　京子
青春の頬染めるごとコキア色づく　佐藤　鈴子
冬を呼ぶ肚の底からハカの声　上里　結

●第一二二回（令和四年十二月十日）
司会　岡田　春人

おろおろと極月をホモ・サピエンス　木之下みゆき
万燈の熟柿国境の無神論　長井　寛
考えの乏しきときの蜜柑剥く　中里　結
言葉から文字への飛翔小鳥来る　藤好　良
懐手コロナ禍・戦火・温暖化　椎名　鳳人
狸汁ワクチン五回打ち終えて　岡田　春人
初霜や言葉は気体陽だまりへ　佐藤　鈴子
冬満月側に火星のラブコール　野口　京子
わらわらと綿虫の旅始まりぬ　下村　洋子
赤鬼に変貌してる柿落葉　髙橋　宗史
眠る子の掌開くクリスマス　橋本志津子

●第一二三回（令和五年一月十四日）
司会　長井　寛

島々を縫って白鳥陣立てる　伊藤　希眸
戦争は遠くて近し霜の土　中里　結
白鳥は風の原型遠干潟　椎名　鳳人
太郎冠者次郎冠者たんと棚探し　木之下みゆき
着膨れて背骨が固くなってゆく　岡田　春人
青氷柱わがうすずみの肺ふたつ　下村　洋子
七草やミネラル入りの微生物　野口　京子
舟を潜ぎ河を渉るや雪の岸　髙橋　宗史
初明り湾をさ迷う大鯨　佐藤　鈴子
憂国忌我が腹筋の消え落ちぬ　藤好　良
女子会の春小袖揺れるカフェラテ　橋本志津子
うつ伏せの利休鼠のこぶしの芽　長井　寛

君津研究句会報告

（於：君津市生涯学習交流センター）

●第三十回（令和四年十月六日）
司会　徳吉洋二郎

無様さも愛おしい人草の花　泉　志眞子
草の花無限の平方根として　並木　邑人
秋澄めりオンザロックの協和音　田沼美智子
草の花母の言の葉やわらかき　鈴木　美幸
ちゃぶ台にわんさと挿して草の花　金澤　惠子
草の花ひと日の貴重な齢に生く　村田　満枝
鄙に生く女系三代草の花　前田　孝子
蚯蚓鳴く孫のラインのカタカナ語　小澤　富子
どなたですスマホで探す草の花　古賀　壽昭
もう里へ帰るのは嫌四十雀　加藤　法子
この国の戦うかたち祈り虫　徳吉洋二郎
忘れられてしまいし私草の花　石井紀美子
さりげなく来し方問わる草の花　森　孝子
腹いっぱい食わせてやりたい草の花　佐藤　鮎美
草の花残り時間を使い切る　長濵　聰子
色残し水に影置く赤トンボ　羽矢　眞人
靴の音悪女目覚める赤い月　山田たかし
歯一本抜かれ遙かな芒原　越野　雄治
華麗なる一時代閉づ曼珠沙華　馬渕　津枝
十六夜を持ち上げている仁王尊　長井　寛

●第三十一回（令和四年十一月十日）
司会　長井　寛

余力ある今が生きどき帰り花　長濵　聰子
返り花少し紅を付けて出る　村田　満枝
晩節や夕日の端の木守柿　前田　孝子
モノクロの今日が煌く秋夕焼　鈴木　美幸
平らかにもの見る日ごろ糸瓜垂る　長井　寛
運不運そのままでいい吾亦紅　泉　志眞子
血縁のときに疎し忘れ花　加藤　法子
帰り花トロイメライに乗せてくる　並木　邑人
下総に声使い切る秋の虫　越野　雄治
卵かけ御飯秋思は胃に流す　田沼美智子
音読の下手になりたり返り花　小澤　富子
懐かしきアルバム括る秋思かな　羽矢　眞人
大粒の星は涙よ帰り花　石井紀美子
栗飯のほっこり炊けて婚記念　森　孝子
大根煮て来し方言って夫と老ゆ　馬渕　津枝
鶺鴒の声深まりて寒さ来る　佐藤　鮎美
秋落暉プーチン何処へ隠れしや　徳吉洋二郎
神無月曾孫三人袋神　古賀　壽昭
雨だれのリズム梢の火焚鳥　山田たかし
秋の風踏み切りの鐘鳴り出しぬ　金澤　惠子

●第三十二回（令和四年十二月一日）
司会　徳吉洋二郎

柿万燈鳶がしきりに笛落とす　加藤　法子
山眠る錆びた記憶を持ち歩く　山田たかし
潮騒へ夕日を散らす冬かもめ　長濵　聰子
近すぎて傷つけ合うか冬薔薇　古賀　壽昭
社会鍋昭和の空が燃えている　徳吉洋二郎
葱月夜真砂女俳句の匂いたつ　田沼美智子
さるすべり舞台をそろそろおりたまえ　吉野　精
茹卵の大きな殻が外れ冬　越野　雄治
小春径真っ直ぐ行けと教えられ　村田　満枝
照紅葉だれも知らない真の闇　石井紀美子
生真面目で無口で上戸とろろ汁　前田　孝子
秋深む一〇三歳のお下げ髪　金澤　惠子
山茶花咲き真実蓋う民主主義　長井　寛
ほろ苦き真実は何処冬の鵙　泉　志眞子
言い合いの後の真冬のキッチンカー　小澤　富子
真剣に友と高め合ふ冬の星　佐藤　鮎美
試歩の杖まだ途中なり芒原　森　孝子
あおぞらにショパン零るる街小春　鈴木　美幸
シクラメン恋の白髪のゆたかなる　馬渕　津枝
筋肉の冬木に真田十勇士　並木　邑人
冬ざれやここ迄生きて悔い非ず　羽矢　眞人

千葉県現代俳句協会　初心者俳句講座

始める！ 俳句　俳句入門

俳句という短い詩にあなたの感性をこめてみませんか？
俳句に少しでも関心のある方、お待ちしています。

1　開催日時　令和５年４月より　月一回　第三土曜日　午後１時～４時
前期　５回（4/15　5/20　6/17　7/15　8/19）
後期　５回（10/21　11/18　12/16　1/20　2/17）

2　会　　場　千葉市生涯学習センター　３階小会議室
千葉市中央区弁天町３－７－７　TEL：043－207－5811

3　句会整理費　前期５回分　5,000円　後期５回分　5,000円

4　講　　師　森須　蘭
千葉県現代俳句協会幹事
自由句会誌主催

羽村美和子
現代俳句協会理事
オープンカレッジ講師
千葉県現代俳句協会幹事長
俳句同人誌代表

5　問い合わせ先　千葉県現代俳句協会　羽村　美和子
TEL：043－256－6584

6　申し込み方法　氏名・住所・電話番号・メールアドレスなどを明記の上、郵便またはメールで係までお申し込みください。
（締め切り 令和５年３月15日）
初心者講座係　白木　暢子
〒276-0022 八千代市上高野1342－4 成田方
e-mail：hazimeruhaiku@gmail.com

強化部だより

千葉県現代俳句協会青年部活動報告

昨年十一月第一回会合を開催し今後の青年部活動方針が決定しました。ＳＮＳを基本的な連絡ツールとし、夏雲システムによるインターネット句会を隔月実施。年二回リアル吟行会計画中。参加希望の方はご連絡下さい。六十歳以上の方は青年部準会員となります。
Kokomiya2003@yahoo.co.jp（青年部・三宅）

第1回夏雲句会（一月開催一人一句抜粋）

寒卵黄身はふたつで我ひとり　東　國人
熊手屋の手締掻き消す発電機　遠藤　寛子
ＤＪめく車内放送春近し　玉山　政美
冬ミモザ帝国主義の夢の果て　無　子
韃靼より洩れこぼれくる瓢の笛　並木　邑人
綿虫に好かれるタイプ心配性　松本　千花
水星まで一緒に行こう冬苺　三宅たくみ
選評も充実し、大いに盛り上がりました。

◆春の吟行会のお知らせ

場　所　中山法華経寺界隈
日　時　令和五年四月二十九日（土）
句会場　船橋市勤労市民センター
十二時五十分より受付
嘱目二句（投句締切十三時二十分）
＊詳しくは同封のチラシをご覧ください。

ひろば

■市原市文化祭俳句大会

十一月三日、高木一惠顧問を主選者に招き、市原市文化祭俳句大会を開催した。大会には県内外から四六五句、小中高生徒による第十三回文芸コンクールでは市内十一校から四六二句の応募があり、当日の席題句会は三十四人が出席して実施した。（並木邑人 記）

☆一句目事前投句、二句目席題／流・残る虫

市原市長賞

漁火の沖へ沖へと月涼し　丸喜　久枝
学帽のまま戦場へ流れ星　加藤　法子

俳句協会賞

木に目鼻笑ふ円空仏涼し　木多芙美子
残る虫床をころがる常備薬　泉　志眞子

議長賞

多機能のいらぬ暮しや衣被　市川みつ子
相続を捨てる捺印残る虫　長濵　聰子

教育長賞

すいつちよん追伸長くなりにけり　井原　美鳥
古本に十字のひもや残る虫　阿部　泰史

文化祭実行委員長賞

打ち水をして風の道つくりけり　白鳥紅星子
泥の鍬洗ふ小流れ夕紅葉　鈴木　喬二

☆文芸コンクール／俳句の部

市原市長賞

初キャンプ悪戦苦闘のばんごはん　国分寺台小四年　上田　征宗
あふれだす君の笑顔とサイダーと　姉崎東中一年　板垣さくら
蝉しぐれ公式多い物理基礎　市原中央高一年　勝間　奈央

俳句協会賞

なつやさいひと口かじると水しぶき　白幡小二年　田中　瑠菜
涼しさや母が食器を濯ぐ音　姉崎東中三年　畠中　芯
新聞をスクラップする原爆忌　市原中央高一年　山本　一路

議長賞

湯けむりや町にひびいた大花火　千種小三年　中倉　凜華
僕は今土からでないカブトムシ　姉崎東中三年　後井　成海
葉桜へ変わる一夜を月照らす　市原中央高一年　大嶌里央子

教育長賞

ひまわりがみつめるさきははれた空　千種小三年　渡邉陽茉凛
炎天下皆でつないだ白い球　姉崎東中三年　平泉　諄
恋心期待を寄せて浴衣着る　京葉高一年　杉本　夏海

文化祭実行委員長賞

まけないぞあせふきとばしシュートうつ　千種小二年　岡本　佑太
夏の雲においでわかる雨がふる　姉崎東中三年　真邉　心美
蝉時雨高校球児の夢のあと　京葉高一年　柳原　颯太

図書紹介

■自句自解Ⅱベスト100『秋尾　敏』

二〇二二年十一月十日刊　ふらんす堂刊

自己に依るただの解説書ではない。例えば「忘却がみんな桜になっている」を。抜粋だが、人はすべてを記憶、ただ意識下に引き出さないだけなので「忘却」は背後の存在だ。桜はすでに「忘却」として満開と語る面白さ。

掲示板

《会員・会友異動》

●逝去（会員）若林佐嗣、遠藤古都女
●退会（会員）鈴木あい、大澤ひろみ
柳本ゆみ、鈴木美津子
市岡舜脩、楠見惠子
中村里子、桃井美千代
馬渕津枝、三須民惠
鳥取芳子、金子　敏
●移転（会員）山本隆之（神奈川県より）
●新会友　馬渕津枝

《令和五年度第一回幹事会》

日　時　令和五年一月二十四日（火）午後一時より
場　所　千葉市民会館
議　題　令和五年俳句大会・春の吟行会
青年部の活動・会報一四八号・初心者講座
現俳本部の動向・各研究句会の状況・会員
会友の動静などについて活発に討議された。

現代俳句千葉　第一四八号
令和五年三月一日発行

発行人　千葉県現代俳句協会
会長　並木　邑人
現代俳句千葉編集部
〒278-0037　野田市野田
六七七-一-A二一五
木之下みゆき
千葉県現代俳句協会事務局
〒277-0084　柏市新柏二-十三-六
岡田　春人
TEL・FAX　〇四-七一六一-一六三九